

スロヴェニア滞在記（カフェ編）

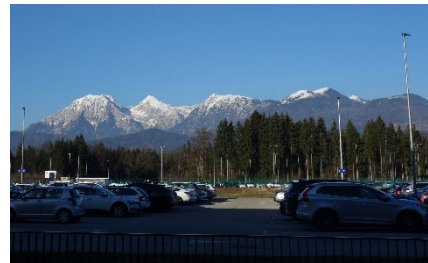
橋爪 真

（北海道大学大学院文學院修士課程）

<滞在記（カフェ編）>

筆者は、北海道大学大学院文學院「共生の人文科学」プロジェクト、旭硝子財団海外研究活動支援奨学金の助成を受けて、2025 年 2 月 24 日から 2025 年 3 月 7 日にかけてスロヴェニアで現地調査を実施しました。以下は、その「滞在記」として執筆したものです。

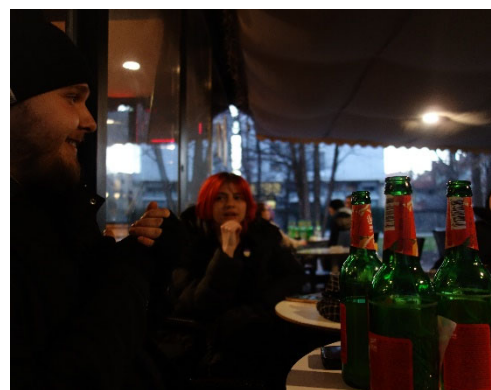
リュブリャナ空港に降り立つと一番に迎えてくれるカムニク＝サヴィニャ・アルプス（右写真）は、どこか札幌から望む手稲山を思い起こさせるものがあります。似ているのは風景だけでなく、スロヴェニアと札幌は、人口も 200 万人程度でほぼ同じです。この中東欧の小さな国は、1991 年にユーゴスラヴィアから独立し、2004 年には EU・NATO 加盟を果たしました。以下では、そんなスロヴェニアでの現地調査について 2 つのカフェを中心にお伝えしたいと思います。



Foerster Bar (Rimska cesta 13, Ljubljana)

Foerster Bar はリュブリャナ大学文学部建物すぐそばのフェルスター公園¹⁾の一角に位置しています。文学部周辺にある *Living room* や *Semafor*（信号）と並び、リュブリャナ大学の学生御用達のカフェです。今回の調査期間では、*Living room* で 1 度チャイラテを飲み、*Foerster Bar* には 2 度訪れ 2 度とも *Union* 社²⁾のラドラーを飲みました。

調査初日の夕方、留学時代の友人と *Foerster Bar* で話をしていると、日本語を学ぶ学部生が声をかけてくれました。リュブリャナ大学では、スロヴェニア以外にもクロアチアやセルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナなどの留学生が日本語を学んでおり、留学時代には地元のバニャ・ルカやスプリットを案内してもらいました。声をかけてきた学生もノヴィ・サド（セルビア第二の都市）出身のようで、話はおのずと現在セルビアで継続しているデモについてになりました。



¹⁾ アントン・フェルスター Anton Foerster (1837-1926) は 19 世紀後半のスロヴェニアにおいて、もっとも重要で評判の高い作曲家のようです。

²⁾ スロヴェニアには、*Laško* 社と *Union* 社という 2 つのビール会社があります（2002 年に *Laško* 社が *Union* 社を買収、2015 年にはハイネケンにより買収される）。

セルビアでは、2024 年 11 月 1 日に発生したノヴィ・サド駅舎崩落事故を契機に、政府のこれまでの選挙不正や汚職に対する不満が爆発し、現在（2025 年 5 月）までデモが継続して行われています。2025 年 3 月 15 日には、犠牲となった 15 人（その後、治療中だった 1 人も亡くなりました）を追悼する 15. Za 15（15 人のための 15 日）と名付けられたデモが、セルビアの首都ベオグラードで行われました。デモの参加者は政府発表でも 10 万人を超えており、主催者発表では 50 万人以上と、セルビア史上最大のデモとなりました。

留学中に教えてもらったセルビア語について話しているときに、“Vučiću pederu”というデモでよく使われるフレーズを教えてくださいました。Vučić（アレクサンダル・ブチッチ）はセルビアの現大統領（2017-）です。彼女はこのデモは、ブチッチ個人に対するだけでなく人権のためのデモであるとも言っていました。しかし、「ブチッチ、ゲイ」というフレーズと人権の関係に少し違和感があったので、私と違ってリベラルなセルビア（同じくノヴィ・サド）出身の友達に聞いてみたところ、“Vučiću pederu”は単なるシュプレヒコールであって、言葉自体にそんなに意味はないとのことでした³⁾。

このセルビアでの抗議に関連して、スロヴェニアでも調査期間中にデモが実施されました。実施されたのは帰国日の 3 月 5 日で、私自身は目撃することができませんでしたが、見送りに来てくれた友達がバスからの写真を送ってくれました。このデモは、直接セルビア政府を批判するというより、ブチッチを支持するリュブリャナ市長ヤンコヴィチに対して行われたものでした。同様に、セルビアのデモに対する支持はクロアチアといった他の旧ユーゴスラヴィア諸国でも見られます。2025 年 3 月 15 日から 16 日にかけて、北マケドニアのナイトクラブで 59 人を犠牲とする火災が発生し、セルビアの病院へ搬送された負傷者をセルビア大統領が訪問した際には、北マケドニアの人々から事件の政治利用に対して批判があがりました。そこからは、ユーゴスラヴィア崩壊後も存在する社会・文化的空間である *Yugosphere* を感じ取りました⁴⁾。

Press Bar (Kidričeva ulica 20, Nova Gorica)

2 つ目のカフェ *Press Bar* はスロヴェニア西部、イタリアのゴリツィアに接するノヴァ・ゴリツァの中心、ベウク広場⁵⁾にあります。第二次世界大戦後に進められたノヴァ・ゴリツァの都市計画では、建物が指導者の名前 TITO の形に配置しました（右写真）。結局この都市計画は実現されませんでした。が、広場からサポティン山に TITO の形に配置された石の文字を見ることができ



³⁾ やはり彼女はリベラルなので、私の質問を受けて意味がないとも言切れないかもしれないと自問していました。

⁴⁾ 留学中に、セルビアとボスニア・ヘルツェゴビナの友人 2 人とクロアチアのプーラへ旅行に行った際には、2 人の出身を聞いた宿のクロアチア人オーナーが 2 人に対して姉妹だと言っているのも聞きました。

⁵⁾ フランツ・ベウク France Bevk (1890-1970) は詩人、小説家、戯曲家でプリモルスカの人々、特にファシズム時代をテーマとしたようです。

ます。このサボティン山の TITO は、NAŠ TITO（私たちのティトー）だった時もあるようです。また、2014年5月9日の戦勝記念日直前には、TITO から JJ（現 SDS 党首ヤネズ・ヤンシャのイニシャル）へと変えられる事件も発生しています。ティトーが率いたパルチザンとその後の共産主義体制への反発として、それらの正統性を否定するヤンシャのイニシャルが使われたのです。そして今回の調査目的は、まさしくスロヴェニア政治における第二次世界大戦とその後の共産主義体制の記憶についてでした。

スロヴェニアは第二次世界大戦において、ドイツ、イタリア、ハンガリーに分割占領されました。イタリア占領下のリュブリャナで占領軍に協力するために創設された村部防衛隊が、イタリア降伏後のドイツ占領下にて郷土防衛隊に再編成され、パルチザン勢力に敵対するという内戦の状況が展開します。ティトー死後から独立にかけて、占領軍に協力した郷土防衛隊の再評価がおこなわれるようになります。そして現在に至るまで、第二次世界大戦と共産主義体制は、スロヴェニア政治において主要な争点の一つとなっています。

例えば、第3次ヤンシャ政権（2020年3月13日～2022年6月1日）は2022年5月12日に「共産主義暴力の犠牲者追悼の日」（5月17日）を制定しパルチザンの正統性に挑戦しました。また「スロヴェニア独立博物館」の創設も決定し、「スロヴェニア現代史博物館」で既にカバーされている1991年のユーゴスラヴィアからの独立を新たに個別に扱おうとしました。これに対して、その後成立したゴロブ政権は2023年5月16日に「共産主義暴力の犠牲者追悼の日」を廃止し、「スロヴェニア独立博物館」も開設前に「スロヴェニア現代史博物館」へ吸収しました。ここでは全体主義の名のもとにファシズムと共産主義を同一視し1991年の独立をもって一つの区切りとするヤンシャ前政権と、それに対抗するゴロブ現政権の対立を見て取ることができます。

今回の調査では、このように政治的争点となっている第二次世界大戦と共産主義体制が、スロヴェニアにおいてどのように記憶されているのかについて博物館や記念公園、地名などから垣間見てきました。以下では、その一部を紹介したいと思います。

体制転換後、他の旧ユーゴスラヴィア、中東欧諸国と同様にスロヴェニアにおいても社会主義時代の記念碑が撤去され、通りの名前も改称されました。首都リュブリャナでは、ティトー通りがウィーン通りへ、革命広場は共和国広場へといったように名称変更が行われました。しかし全ての名称が変更されたわけではありません。現在でもスロヴェニア各地で、第二次世界大戦や共産主義体制と関連する地名を確認することができます。

Press Bar が位置するキドリッチ通り（Kidričeva ulica）もその一つです。ボリス・キドリッチ（1912-1953）は、スロヴェニアのパルチザンを率い、戦後すぐはスロヴェニアの首相やスロヴェニア共産党の書記局長を歴任し、その後ユーゴスラヴィアの経済担当相に就任したスロヴェニアを代表する政治家の一人です。彼の像は首都リュブリャナの官邸横の欧州議会広場（かつてはキドリッチ広場）、第2の都市マリボルの駅前（右写真）で見ることができました。官



邸という政治的に重要な場所の横や駅前という目立つ場所にあることから、キドリッチがスロヴェニアにおいて重要な人物とみなされてきたことが分かります。

リュブリャナではウィーン通りへと変更されたティトー通りは、マリボルや鍾乳洞で有名な観光地であるポストイナでは名称変更されることなくそのまま残っていました。マリボルでは街の中心でティトー通りとパルチザン通りが合流しており（右写真）、パルチザン英雄の名を冠した通りもよく見かけました。リュブリャナではこのような通りの名前は見かけませんでしたが⁶⁾、パルチザンの記念碑は多く残っており、学校や官邸の一角に設置されているものもありました。スロヴェニアでは、教育機関や政治的に重要な建物の傍や駅前の目立つ場所に記念碑が残っており、第二次世界大戦や共産主義体制と関連する名前の通りにもさまざまな都市で出会いました。第二次世界大戦時の包囲跡を遊歩道として整備した「記憶と友情の道」が散歩やランニングコースとして親しまれていたことから、それらの過去の遺産が日常に溶け込んでいるように感じられました。



今回の調査では、スロヴェニアだけでなくクロアチアの政治において重要なブライブルクやテズノ、テハリエ、コチェウスキ・ロクという対枢軸協力者の記念公園も訪れました。これらについても、またどこかの機会に紹介できればと思います。

⁶⁾ 帰国後リュブリャナ市のホームページで調べてみるとパルチザン通りは残っているようです。